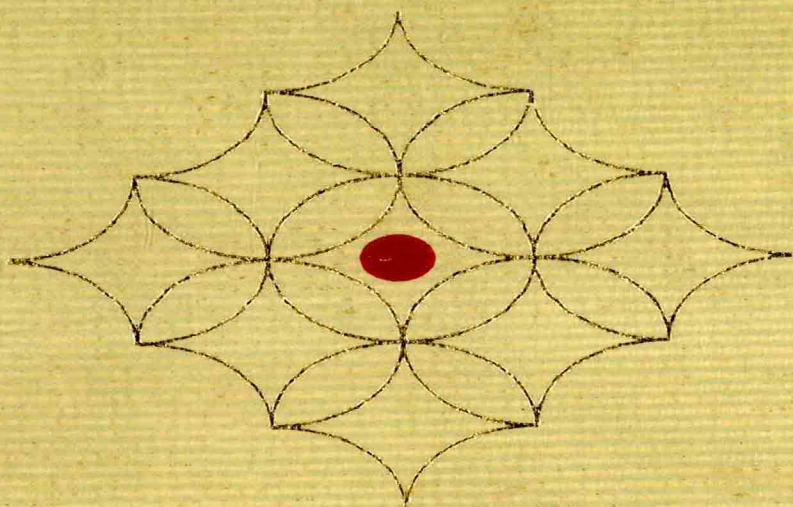




現代日本文學大系

51

横光利一 集
伊藤 整



筑摩書房

現代日本文學大系 51

昭和四十五年八月二十五日
昭和四十八年七月三十日

初版第一刷発行
初版第二刷発行

横光利一・伊藤整集

著者

横光利一
伊藤整

発行者

井上達三

発行所

十代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10051 (出版社) 4604

横光利一集 目次

卷頭写真
筆蹟

上海

三

日輪

九七

蠅

一三

静かなる羅列

一三五

ナポレオンと田虫

一四〇

春は馬車に乗つて

一四六

花園の思想

一五三

機械

一五八

微笑

一七五

感覚活動

一五

伊藤整集 目次

卷頭写真
筆 蹟

鳴海仙吉

一九

生物祭

二七

ある女の死

三三

組織と人間

三九

〔付録〕

新感覚派時代の横光利一

片岡良一

三七

横光利一

川端康成 三六

横光利一・その研究小史

瀬沼茂樹 四三

伊藤整論

平野謙 四八

伊藤整論

寺田透 四五

父、伊藤整の死

伊藤禮 四〇

年譜

四九

著作目録

四八

橫光利一集

寢園

了々
横元利

8月14日
二日二夜

間長

ふつと
もてあがり
代り



の清元を横元、伊福家の横元が

上海

一

満潮になると河は膨れて逆流した。測候所のシグナルが平和な風速を示して塔の上へ昇つていつた。海関の尖塔が夜霧の中で煙り始めた。突堤に積み上げられた樽の上で、苦力達が湿つて来た。鈍重な波のまにまに、破れた黒い帆が傾いてぎしぎし動き出した。白皙明敏な中古代の勇士のやうな顔をしてゐる参木は、街を廻つてバンドまで帰つて来た。波打際のベンチにはロシア人の疲れた春婦達が並んでゐた。彼女らの黙々とした瞳の前で、潮に逆らつた舢舨の青いランプがはてしなく廻つてゐる。

「あんた、急ぐの。」

春婦の一人が首を参木の方へ振り向けて英語で訊ねた。彼は女の二重になつた頸の皺に白い斑点のあるのを見た。

「空いてゐるのよ、ここは。」

参木は女と並んで坐つたまま黙つてゐた。灯を消して蜷集してゐるモーターボートの首を連ねて、鎖で縛られた栈橋の黒い足が並んでゐた。

「煙草。」と女は云つた。

参木は煙草を出した。

「毎晩ここかい。」

「ええ。」

「もうお金もないと見えるな。」

「お金もないし、お国もないわ。」

「それや、困つたの。」

霧が帆船にからまりながら湯気のやうに流れて来た。女は煙草に火を点けた。石垣に縛られた船が波に揺れる度毎に、船名のローマ字を瓦斯燈の光りに代る代る浮き上らせた。樽の上で賭博をしてゐる中国人の首の中から、鈍い銅貨の音が聞えて来た。

「あんた、行かない。」

「今夜は駄目だよ。」

「つまらないわ。」

女は足を組み合はした。遠くの橋の上を馬車が一台通つて行つた。参木は時計を出して見た。甲谷の来るのはもう直ぐだつた。彼は甲谷に宮子と云ふ踊子を一人紹介される筈になつてゐた。甲谷はシンガポールの材木の中から、此の濁つた底知れぬ虚無の街の上海に妻を娶りに来たのである。濡れた菩提樹の隙間から、縞を作つた瓦斯燈の光りが、春婦達の皺のよつた靴先へ流れてゐた。すると、その縞の中で、ひと流れの霧が急がしやうに朦朧と動き始めた。

「帰らうか。」と一人の女がいつた。

春婦達は立ち上ると鉄柵に添つてぞろぞろ歩いた。一番後になつた若い女が、青ざめた眼でちらりと参木の方を振り返つた。すると、参木は煙草を銜へたまま、突然夢のやうな悲しさに襲はれた。競子が彼に別れを告げたとき、彼女のやうに彼を見降ろして行つて了つたからである。

春婦達は船を繋いだ黒い縄を跨ぎながら、樽の間へ消えてしまつた。後には踏み潰されたバナナの皮が、濡れた羽毛と一緒に残つてゐた。突堤の先端に立つてゐる警邏の塔の入口から、長靴を履いた二本の足が突き出てゐた。参木は一人になるとベンチに凭れながら古里の母のことを考へた。その苦勞を続けてなほますます優しい手紙を書いて来る母のことを。——彼はもう十年日本へ帰つたことがない。その間、彼は銀行の格子の中で、専務の食つた預金の穴をペン先で縫はされてゐただけだつた。彼は、忍耐とは、此の生活の上で他人の不正を正し

く見せ続ける努力にすぎぬと云ふことを知り始めた。さうして、彼はそれが馬鹿げたことだと思ふ以上に、いつの間にかだんだんと死の魅力に牽かれていつた。彼は一日に一度、冗談にせよ、必ず死の方法を考へた。それが最早や彼の生活の唯一の整理法であるかのやうに。彼は甲谷を攔まへて酒を飲むといつも云ふのだ。

——お前は百万円擲んだとき、成功したと思ふだらう。ところが俺は、首を縄で縛つて、踏台を足で蹴りつけたとき、やつたぞと思ふんだ。——

彼は絶えずその真似だけはやつて来た。しかし、彼の母が頭の中に浮び上るとまたその次の日も朝からズボンに足を突き込んで歩いてゐた。

——俺の生きてゐるのは、孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。——

参木に許されてゐることは、事実、ただ時々古めかしい幼児のことを追想して涙を流すことだけだつた。彼は泣くときに思ふのである。

——えーい、ひとつ、ここらあたりで泣いてやれ。——

それから、彼はポケットへ両手を突き込んで各人^{おれ}の自棄^{やけ}糞^{くそ}馬鹿騒ぎを、祭りを見るやうに見に行くのだ。——

しかし、甲谷がシンガポールから来てからは、参木は久し振りに元氣になつた。甲谷と彼とは小学校時代からの友達だつた。参木は甲谷の妹の競子を深く愛してゐた。しかし、甲谷がそれを知つたのは、競子が人妻になつて後だつた。甲谷は云つた。

「馬鹿だね、君は。何ぜ俺に一言それを云はなかつたのだ。云つたら俺は。」

云つたら甲谷は困るにちがひないと、参木は思つて黙つてゐた。そして、今までひとりひそかに困つてゐたのは参木である。だが、彼は今は一切のことをあきらめて了つてゐる。——生活の騒ぎのことも、彼女のことも、日本のことも。ただ時々彼は海外から眺めてゐると、日本の着々として進歩する波動を身に感じて喜ぶことがあるだけだつ

た。しかし、彼は最近、甲谷から競子の良^よ人が肺病で死にかかつてゐると云ふ消息を聞かされてからは、身体から釘が一本抜けたやうな自由さが感じられて来たのである。

二

崩れかけた煉瓦^{れんが}の街。其の狭い通りには、黒い着物を袖長に着た中国人の群れが、海底の昆布のやうにぞろり満ちて淀んでゐた。乞食等は小石を敷きつめた道の上に蹲^{すま}つてゐた。彼等の頭の上の店頭には、魚の気胞や、血の滴^たつた鯉の胴切りが下つてゐる。そのまた横の果物屋には、マンゴやバナナが盛り上つたまま、舗道の上まで溢^{あふ}れてゐた。果物屋の横には豚屋がある。皮を剥^むかれた無数の豚は、爪を垂れ下げたまま、肉色の洞穴を造つてうす暗く窪^{くぼ}んでゐる。そのぎつしり詰つた豚の壁の奥底からは、一点の白い時計の台盤だけが、眼のやうに光つてゐた。

此の豚屋と果物屋との間から、トルコ風呂の看板のかかつた家の入口までは、歪^{ゆが}んだ煉瓦の柱に支へられた深い露路が続いてゐる。参木と逢ふべき筈の甲谷はトルコ風呂の湯気の中で、蓄音器を聴きながらお柳に彼の背中をマツサーヂさせてゐた。お柳は富豪の中国人の妾^{めかけ}になりながら、此の浴場の店主を兼ねた。勿論、お柳は客の浴室へ出入すべき身ではない。だが、彼女の好みにあつた客を選ぶためには、番号のついたその幾つもの浴室を遊ばせておくことは不経済には相違ない。

お柳は客の浴室へ来るときは前からいつも、身体いつばいに豊富な石鹼の泡を塗つてゐた。マツサーヂがすむと、主人は客の身体に石鹼を塗り始めた。——間もなく二人の首が、真面目な白い泡の中から浮き上るとお柳は云つた。

「今夜はどちら。」

甲谷は参木と逢はねばならぬことを考へた。

「参木が突堤で待つてゐるのだが、もう幾時です。」

「さうね、でも、抛つといつて、あの方こちらへいらつしやるに違ひないわ。それよりあなた、いつ頃シンガポールへお帰りになるの。」
 「それは分らないんですよ。僕は材木会社の外交部にゐるもんですから、こちらのフイリツピン材を蹴落してからでなくちや、と思つてゐるんです。」

「ぢや、もう奥さまはお探しになりましたの。」

「いや、それは、まアさう急いだことぢやなし、——何も女房のことなんか、今ごろ云はなくなつて、良いでせう。」

お柳の泡がいきなり甲谷の類に叩きつけられた。スイッチがひねられた。壁から吹き込む蒸気と一緒に蓄音器がベリーマインを歌ひ出した。それに合せて、甲谷は小きぎみなステツプを踏み始めた。するとゆつくり絞り出された石鹼の泡は、その中に包んだ肉体を清めながら、ぼたぼた白い花のやうに滴つた。やがて、蒸気が浴室に溢れ出すと、一面長方形の真白な霧の中に、主人も客も茫々として見えなくなつた。蒸気の中からお柳の声が聞えて来た。

「あなたに馬券分けようか。」

「もうブレミヤムがついてるんですか。」

「それや、つくさ。でも、負けてもいいわよ。」

「ああ、苦しい、一寸その蒸気、とめてくれないかな。」

「だつて、もういい加減に覚悟を定めるもんよ。ここちや誰だつて、一度は死ぬほど苦しくなるんだから。」

そのまま、二人の声は切れて了ふと、蒸気もぶつりととまつてしまつた。

三

参木は疲れながらトルコ風呂まで帰つて来た。しかし、そのときはもう甲谷は参木に逢ひに突堤へ行つた後だつた。参木は応接間のソファに沈み込んだまま黙つてゐた。浴場の奥から湯女達の笑ふ声と一緒に、ポルトギーズの猥雑の歌が聞えて来た。時々蒸気を抜く音が壁

を震動させると、テーブルの上の真赤なチューリツプが首を垂れたまま慄へてゐた。一人の湯女が彼の傍へ近寄つて来た。彼女は参木の横へ腰を降ろすと横目で彼の高く締つた鼻を眺めてゐた。

「眠いのかい。」と参木は訊ねた。

女は両手で顔を隠して俯向いた。

「風呂は空いてるのかね。」

女が黙つて頷くと参木は云つた。

「ぢや、ひとつ頼まう。」

参木は前から此の無口な女が好きであつた。彼女の名はお杉と云ふお杉は参木が来ると、女たちの肩越しにいつも参木の顔をうつとり眺めてゐるのが常であつた。間もなく湯女達が狭い廊下いつばいに水々しい空気をたてて乱れて来た。

「まア、参木さん、暫くね。」

参木はステツキの握りの上に顎を乗せたままじろりと女達を見廻した。

「あなたの顔は、いつ見てもつまんなさうね。」と、一人が云つた。

「それや、借金があるからさ。」

「だつて借金なんか、誰でもあるわ。」

「それぢや、風呂へでも入れて貰はう。」

女達はぱつと崩れて笑ひ出した。そこへお杉が浴室の準備を整へて戻つて来た。参木は浴室へ這入ると、寝椅子の上へ仰向けに長くなつた。皮膚が湯気に浸つて膨れて来た。彼はだんだんに眠くなると、ふと此のまま蒸気を出し放して眠つてみようと考えた。彼はスイッチをひねるとタオルを喰へて眼を瞑ぢた。身体が刻々に熱くなつた。もし此のまま死ねたらとさう思ふと、競子の顔が浮んで来た。債鬼の周章^あてた顔がちらついた。残忍な専務の顔が。——専務の食つた預金の穴を知つてゐるのは彼だけだつた。間もなく銀行は停止を食ふにちがひない。格子の中から見た無数の顔が、暴風のやうに渦巻くだらう。だが、駄目だ。何もかも、人間の皺を製造するために出来てゐるのだ。

「ドアが開いた。誰でもいい。参木は眼を瞑つたまま動かなくつた。空気が幅広い圧力で動揺した。すると彼はいきなり、タオルで眼かくしをされてゐた。お柳だ。お柳なら、皺を延ばすのが商売だ。」

「お杉さん。」と参木は故意にお杉の名前を云つてみた。

誰も彼には答へなかつた。参木はやがてお柳が自分に擦り寄るであらう誘ひをお杉が自分にするものとして思ひたかつた。いや、それよりお柳に、自分がお杉と遊ぶ楽しみを知らせたかつた。彼はまだ一度もお柳の誘ひを赦したことがない。それ故お柳を怒らすことが、彼には彼女の感情をますます華やかに感じる事が出来さうに思はれたのだ。彼は眼かくしをされたまま、にやにやしながら、両手を拡げて身の廻りを探つてみた。

「おい、お杉さん、逃げようたつて逃さぬぞ。俺の手は蜘蛛みたいな手だから、用心してくれ。」

すると、彼の予想とは反対に、急にドアが開いて誰か出て行く気配がした。此の空虚な間に何事が起るのだらう。参木は暫くちつとしたまま、空気に触れる皮膚に意識を集めてゐた。と、突然、ドアの外で、荒々しい音がした。瞬間、彼の上へ突き飛ばされた女があつた。すると、女は彼の足元で泣き始めた。お杉だ。——参木は起つた事件の一切を了解した。彼はお柳に対して激しい怒りを感じて来た。だが、今怒り出しては、お杉が首になるのは分つてゐた。参木は自分でタオルを解くと、泣いてゐるお杉の乱れた髪を跳めてゐた。彼はお杉に黙つて浴室から出ると服を着た。それから、彼は別室へ這入つてお柳を呼んだ。お柳は笑ひながら這入つて来ると、白々しいとぼけた顔で彼に云つた。

「まア、随分今夜は遅かつたわね。」

「遅いは遅いが、しかし、さつきはどうしたんだ。」

「何が？」

「いや、あのお杉さ。」と参木は云つた。

「あの子は駄目よ。意気地が無くて。」

「それで、僕にひつつけようて云ふんかい。」

「まア、さうしていただだけや、結構だわ。」

参木は自分の戯れが間もなく女一人の生活を奪ふのだと気がついた。彼がお杉を救ふためには、お柳に頭を下げねばならぬのだ。だが、彼がお柳に頭を下げたら、なほ彼女はお杉を抛り出すに定つてゐるのだ。それなら、自分はどうすれば良いのだらう。参木は寝台の上からお柳の片手を持つと抱き寄せるやうにして云つた。

「おい、お柳さん、俺がこんなことを云ふのは初めてだが、実は俺は、此の間から死ぬことばかり考へてゐてね。」

「どうしてそんなに死にたいの。」とお柳はひやかすやうに云つた。

「どうしてつて、まだ分らぬ柄でもないだらう。」

「だつて、あたしや、死ぬ人のことなんか分ないさ。」

「これほど情けを籠めてゐて、それにまださう云はれるやうぢや、もう俺も死ぬことも出来ぬぢやないか。いい加減に何んとか、しかるべく云ひなさい。」

お柳は参木の肩を叩くと云つた。

「ふん、黙つて聞いてたら、女殺しのやうなことを云ひ出すわね。これぢや、あたしだつて死にたくなるわよ。」

お柳は立ち上ると部屋の中から出ようとした。参木はまたお柳の手を持つた。

「おい、何んとかしてくれ。このまま行かれぢや、俺は今夜は危いんだ。」

「いいよ、あんなにか死んだつて、くたばつたつて。」

「俺が死んだら、だいいちお前さんが困るぢやないか。」

「さアさア、馬鹿なことを言はないで、放してよ。今夜はあたしだつて、死にたいのよ。」

お柳は参木の手を振り切つて出ていつた。彼は此の馬鹿げた形の狂ひを感じると、お柳に対する怒がますます輪をかけて嵩じて来た。彼

は寝台の上へ倒れたまま、心をなだめるやうに、毛布の柔かな毛なみをそろりそろりと撫でてみた。すると、またドアーが開いた。と、またお杉が突き飛ばされて転んで来た。お杉は倒れたまま顔も上げずに泣き始めた。参木は彼女の傍へ近よることが出来なかつた。彼はたゞ寝台の上から、お杉の倒れた背中のひくひく微動するのを眺めてゐた。彼は生毛の生えてゐるお杉の首もとかから、黒い金魚のやうなまめかしさを感じて来た。彼はちがぢかとお杉の首を見ようとして降りていつた。しかし、ふと彼は、お柳がどこからか覗いてゐるのを嗅ぎつけると、また首をひつ込めた。

「おい、お杉さん。こつちへ来なさい。」

彼はお杉の傍へ近よると彼女を抱きかかへて寝台の上へ連れて来た。お杉はすくみながら寝台の上へ乗せられても、まだ背中を参木に向けたまま泣き続けた。

「おい、おい、泣くな。」と参木は云ふと、ひとり仰向きに寝ころんで、楽しむやうにお杉の顔を眺め始めた。

お杉は一寸参木の片手が肩へ触れると、「いやだいやだ。」と云ふやうに身体を振つた。が、彼女は寝台から降りようともせずに、袂を顔にあてて泣き続けた。参木はお杉の片腕を撫でながら、

「さア、俺の話を聞くんだけ。良いか、昔、昔、ある所に、王様とお姫さまとがありました。」

すると、お杉は急に激しく泣き出した。参木は起ち上ると眉を顰めたまま、寝台から足をぶらぶらさせて黙つてゐた。彼は天井に停つてゐる煽風機の羽根を眺めながら、どうして好きな女には、指一本触れることが出来ないのかと考へた。これには何か、原理がある。——暫く彼は小首をかしげながら、しやくり上げるお杉の泣き声を聞いてゐたが、

「さて、俺の帽子はどこいつた？」と見廻すと、そのまま部屋の外へ出ていつた。

四

甲谷は突堤へ行つたが参木の姿は見えなかつた。たゞ掃除夫のうす汚れた赤い法被が、霧の中でごそごそと動いてゐるだけだつた。しかし、なほよく見ると、菩提樹の下の真暗なベンチの上で、印度人の髻が幾つもの鳥の巢のやうにかたまつて竦んでゐた。彼は芝生の先端を歩いてみた。二つの河の流れの打ち合ふ波のうへで、大理石を積んだ小舟がゆるゆると波にもまれて廻つてゐた。甲谷は、チューリップが円陣をつくつて咲いてゐる芝生の中まで歩いて来た。すると、突然、彼は自分の美しい容貌の変化を思ひ出した。彼は直ぐ引き返すと、車を呼び寄せて宮子のゐる踊場の方へ走らせた。

——もし宮子が結婚しないと云へば、いや、何に、そのときはそのときさ。

踊場の周囲には建物がもたれ合つて建つてゐた。蔦がその建物の割れ目から這ひながら、窓の上まで蔽つてゐた。踊場では、ダンスガールのきりきり廻つた袖の中から、アジャ主義者の建築師、山口が甲谷を見つけて笑ひ出した。山口は甲谷がシンガポールへ行く前の遊び仲間の一人であつた。甲谷は山口と向ひ合つて坐ると云つた。

「実に久し振りだね。此の頃は君どうだ。いつ見ても楽しさうな顔をしてゐるのは、君の顔だよ。」

「それが、見た通りの醜態だね。ああ、さうだ。参木に此の間逢つたら、君は嫁探しに来たつて云つたが、ほんたうかい。」山口は溢れるやうな微笑を湛へて甲谷を見上げた。

「うむ、嫁もついでに探していかうと思つちやゐるんだが、いいのがあるかね。あつたら一つ頼みたいね。もつとも、君のセコンドハンドぢや御免だぜ。」甲谷はにやにや笑ひながらホールの中を見廻した。

「いや、ところが、それになかなか話せる奴がゐるんだよ。オルガといふロシア人だが、どうだひとつ。参木の奴にどうかと思つたのだが、あ奴はああ云ふドン・キホーテで面白くないし、どうだ君は。——意

志はないか。」と山口は真面目な顔で相談した。

「ぢや君にはもう意志はなくなつてゐるんだな。そのオルガといふのは？」

「いや、それやある、しかし、ああ云ふ女は他人のものにしとく方が、どうも面白味が多さうなんだよ。」

甲谷は山口の言葉を聞き流しながら、這入つて来るときから探しつづけてゐる宮子の姿をまた捜した。だが、宮子の姿はいつまでたつても見えなかつた。

「しかし、僕の細君にして、それからまだ君が面目をほどこさうと云ふんぢや、それや、あんまり面白すぎるぢやないか。」

「いいぢやないか、細君なんかにしなけれや。倦きればまたそのときはそのときさ。まア、今はトウエンテイ見当の月給で結構だよ。」

山口は脇をつきながら、甲谷のうろろうしつづける視線の方を自分も追つた。外人達がぼつりぼつりとホールの中へ這入つて来た。

「ときに話は違ふが、古屋の奴はどうしてゐる。」と甲谷は訊ねた。

「ああ、古屋か、あの男は芸者の細君を月賦で買つては変へてるよ。」

「まだこちらにゐるのかね。」

「うむ、ゐる。前の細君だつてまだ全額払込にはなつてゐないんだのに、また次のが、これが月賦だ。」

「御橋はどうした。」

「御橋も達者だ。しかし、先生、どうもあんまり妾を大切にするのでつき合ひ難いよ。あ奴も参木のやうな馬鹿者だね。」

しかし、甲谷は山口の話を聞かうともせず、うつろな眼で宮子はどうした、宮子はどうした、と絶えず思ひながらまた訊ねつづけていくのであつた。

「ふむ、木村はどうした。」

「木村には先日一度逢つたかな。奴さん、相変らず競馬狂でね、いつだかロシア人の妾を六人大競馬に連れてつて、負け出したのさ。ところが、あの男は振つてゐる。負けたらその場で妾を一人づつ売り飛ばすぢやないか。それですつかり負けちやつてね、その日に六人とも売つちやつて、まだお負けに上着からチョツキまで質に叩き込んで、さアてとか何んとか云つて澄してゐるんだが、先生が妾を持つのは、まアあれは貯金をしてゐるやうなものなんだよ。俺もお蔭でだいぶん迷惑をさせられたが、オルガといふ女も、つまり、木村から処分されて来たもんだ。」

しかし、甲谷は別段面白くもなささうに、「君はこのごろどうしてゐるんだ。」としばらくたつてまた訊ねた。

「俺か、俺は此の頃は建築屋はそつちのけで、死人拾ひと云ふ奴をやつてゐる。此奴は骨の折れる商売だが、なかなか文化に有益な商売でね。一度俺と一緒に来て来ないか。面白い所を見せてやるよ。」

「それや、どう云ふことをするんだね。つまり死人の売買か。」と甲谷は訊ねた。

「いや、そんな野蛮なもんぢやないよ。中国人から死体を買ひ取つて掃除をしてやるんだが、一人の死人で、生きてゐるロシア人の女を七人持てる、七人。それもロシアの貴族だぞ。」

どうだと云ふやうに山口の唇は歪んでゐた。此の豪傑ならそれは平気なことになりがひない、と甲谷は思つて踊りを見た。これはまた、う

どんを握ねてゐるやうな踊りの隙から、衆手達の自棄糞なトランベツトが振り廻されて光つてゐた。すると突然、山口は踊りの中の一人の典雅な中国婦人を見つけて囁いた。

「あッ、あれは芳秋蘭だ。」

「芳秋蘭つて、それや何んだ。」と甲谷は初めて大きな眼を光らせる

と山口の方へ首をよせた。

「あの女は共産党では、たいへんだ。君の兄貴の高重君はあの女を知つてるよ。」

甲谷が振り返つて芳秋蘭を見ようとすると、そこへ、はつそりと肉の緊つた、智的な眼の二重に光る宮子が、二階から降りて来て甲谷の傍の椅子へ来た。

「今晚は、お静かだわね。」

「うむ、いま細君の話をしてるところだよ。」と甲谷は云つて手を出した。

「まア、さう、ぢや、あたしあちらへ逃げてませう。」

宮子は身を翻すやうに、ひらりと盆栽の棕櫚を廻つていくと、甲谷はまた山口の方へ向き返つた。

「それで、さつきの死人の話だが、何んだか少し込み入つた話ぢやないか。」

「死人か。まアまア、それより一踊りして来なさい。死人のことは後でもいいさ。」

「それぢや、一寸失敬。」

甲谷は宮子に追ひついて二人で組むと、踊りの群れの中へ流れていった。宮子は甲谷の肩に口をあてて囁いた。

「今夜の足は重いわね。あたしはその人の重さで、何を考へてるのかつて云ふことが、まアだいたい分るのよ。」

「ぢや、僕は？」と甲谷は訊ねた。

「あなたは、奥様が見つかりさうよ。」

「左様。」

実は、甲谷は一人の死人と七人の妾について考へたのだ。——何んと奇怪な生活法ではないか。廃物利用の極意である。甲谷はその話を聞くまでは、激しく宮子と結婚したい希望をもつてゐた。だが、七人の女と一人の死人の価値とを聞いてからは、妻帯者の不幸ばかりが浮んで来てならぬのであつた。踊りがすむと甲谷は山口の傍へ戻つて来た。

「君、さつきの死人の話をもう少し聞かしてくれよ。」

「まア、さう急がなくつたつて、死人はいつてもぢつとしてゐるよ。」

「ところが、貧乏だつて、ぢつとしてゐるさ。」と甲谷は云つてまた宮子の方をちらりと見た。

「だつて、君は貧乏してゐるやうには見えんぢやないか。」

「いや、それや、僕も僕だが、それより参木の奴のことなんだよ。あ奴をもう少し何んとかしてやらないと、死んで了ふ。」

「死ぬつて、参木の奴が？」と山口は顎を突き出した。

「うむ、あ奴は近頃、死ぬことばかり考へてをるのだ。」

「ぢや、俺に金儲けをさせてくれるやうなもんぢやないか。」

甲谷は足をぱつと両方へ拡げると、身を揺り動かして大きな声で笑ひ出した。

「さうだ、あの男は、今に君に金儲け位はさすだらう。」

「それや、面白い。よし、そんならひとつ、参木を俺の会社の社長にしてやらう。」

甲谷は山口の豪傑笑ひの中から、参木に対するいくらかの友情を嗅ぎつけると喜び勇んで乗り出した。

「君の会社は何んと云ふんだ。」

「いや、名前はまだだが、ひとつ、君から参木の奴に話してみてくれ。あ奴が死人になりたいなんて、それや、もつて来いの商売だよ。」

「それで、その死人をどうする会社だ。」

「つまり、人間の骨をそのままの形で保存しとかうつて云ふんだ。これを輸出すると一人前が二百円になつて来る。」

甲谷は二百円もする会社の材木の太さを考へながら、

「しかし、そんなに人間の骨が売れるのか。」と小声で訊ねた。

「君、医者に売るんだよ。医者ならそこは彼らの手先でどこへでも自由が効くさ。もともと僕だつて、学術用に英国人の医者から頼まれたのが初まりなんだ。」

甲谷は参木が人間製造会社の支配人に納まつてゐる所を想像した。すると、やがて、彼らしい幸福が、骸骨の踊りの中から舞ひ上つて来るのではないかと思はれた。

「それで踊りを見てゐて、よく骸骨に見えないもんだね。」と甲谷は眉を吊り上げて笑つた。

「それが此の頃困るんだ。俺の家の地下室は骸骨でいっぱいさ。生き

てる人間を見てゐても一番先に肋骨が見えてくる。とにかく君、人間と云ふ奴は誰でも障子みたいに骨があるんだと思ふと、をかしくなるもんだよ。」

笑ひながらアブサンを飲む大きな山口の唇が開きかかると、再びダンスが始まり出した。甲谷は立ち上つて彼に云つた。

「君、ひとつ踊つて来るからね、そこから骸骨の踊りでも見てゐてくれ。」

甲谷はまた宮子と組んで、モールの下で揺れ始めた男女の背中の中へ流れ込んだ。甲谷は宮子の冷たい耳元で囁いた。

「君、今夜は宜しく頼んでおきます。」

「何に？」

「いや、何んでもないさ。いたつて当り前のことだよ。」

「いやよ。風儀が悪いぢやないの。」

「だつて、結婚しなければなほ風儀が悪くなるさ。」

「もう、お饒舌しちや、塵埃を吸ふわよ。」

しかし、甲谷は山口の眼がうす笑ひを浮べて光つてゐるのを見る度に、いづれどちらも骸骨だと気がつくやうに、激しく宮子の背中を人の背中で廻し始めるのであつた。そのとき、宮子は山口がしたやうに、急に甲谷の耳もとで小声で云つた。

「あなた、ちよつと、あそこに芳秋蘭が来てゐるわ。」

甲谷は山口に云はれたまま忘れてゐた女のことを思ひ出して振り返つた。だが芳秋蘭の姿はもう廻る人の輪の中に流れ込んで見えなかつた。

「君、その芳秋蘭といふ女の方へ、僕をひっぱつていつてみてくれなにか。さつきも山口がその女の事を云つてたが、何んだ。」

宮子は甲谷を引いて逆に流れの中を廻つていつた。甲谷はあれかこれかと宮子の視線のままに首を廻してゐるうちに、不意に背後の肩の中から、一對の中国の男女の顔が現れた。甲谷は吹かれたやうに眼を据ゑると宮子に云つた。

「あれか。」

「さう。」

甲谷は宮子を今度は逆に引きながら、芳秋蘭の後から廻つていつた。すると、くるくる廻る度毎に、芳秋蘭の顔も舞ひながら、男の肩の彼方から甲谷の方を覗いてゐた。甲谷はその美しい眼前の女性を、自分の兄の高重も知つてゐるのだと思ふと、かすかに微笑を送らずにはゐられなかつた。しかし、秋蘭の眼は澄み渡つたまま、甲谷の笑顔の前を平然と廻り続けて踊りが終んだ。——歌余舞ひ倦みし時、嫣然巧笑。去るに臨んで秋波一転——。甲谷は徐校濤の美人譜中の一句を思ひ浮べながら、宮子にテイクットを手渡した。

「あの婦人は実に綺麗だ。珍らしい。」

「さうね。珍らしいわ。」

宮子のむつと膨れかつた口元を笑しげに眺めながら、甲谷は山口の傍へ戻つて来るとまた云つた。

「君、あの芳秋蘭といふ婦人は珍らしい。どうして君はあの女を知つてゐるんだ？」

「僕は君、これでも君の知らぬ間にアジャ主義者のオーソリチーになつてゐるのだぜ。此の上海で有名な中国人なら、たいていは知つてゐるさ。」山口は満面脂肪に漲つた顔を笑はせて秋蘭の方を見た。

「ぢや、僕は以後心を入れかへて君を尊敬するから、ひとつあの婦人を紹介してくれ。」

「いや、それは駄目だ。」と山口は云つて手を上げた。

「どうしてだ。」

「だつて、君を紹介するのは、日本の恥をさらすやうなものぢやないか。」

「しかし、君がもう代表して恥をさらしてくれてゐるなら、何も僕が晒したつてかまはぬだらう。」

山口は虚を突かれたやうに大げさに眼を見張つた。

「ところが、それが、僕のはお柳の主人の銭石山に紹介されたんだか

らね。銭石山より、まだ僕の方がましだらう。」

「ぢや、今夜は思ひとまるとしようかね。」

甲谷と山口が、片隅の芳秋蘭のテーブルの方へ視線を奪はれて黙り始めると、それに代つて、宮子を張り合ふ外人達が、夜毎の騒ぎを始めて快活に動き出した。山口は甲谷の腕を引くと、宮子の方を向きながら云つた。

「おい甲谷、君はあの宮子が好きなんぢやないか。」

「さう、まア、見た通りの所だね。」

「ところがあれは、腕が凄^{こわ}いからやめなさい。あそこにある外人は、見てるとみなあの女の云ひなりだよ。」

「ぢや、君も一度は叩かれたことがあるんだな。」

「いや、あの女は、日本人なんか相手にしたら、お目にかからんよ。あれはスパイかも知れないぜ。」

「よろしい。」と甲谷は云ふと、昂然^{かうぜん}と胸を反らした。

二人は煙草をとり上げて吸ひながら、暫く外人達の宮子をからかふ会話を耳を傾けて黙つてゐた。

「あれは君、アメリカ人かい。」としばらくして甲谷は訊ねた。

「うむ、あれはバーマシツピルデングの社員が二人と、マールカン・マリン・コンパニーが一人だ。ところが、今日はこれならまだ静な方で、ときどき宮子を中心に、ここで歐洲大戦が始まることもあつたりしてね。それが楽しみで、実はここへ来るんだが、あの女の本心だけは流石^{さすが}の俺にも分らんね。」

山口はゆつくり首をめぐらせて、外人達から芳秋蘭のゐるテーブルの方へ向き返つた。すると、「おッ」と彼は云つて背を起すと、うろたへたやうに周囲をくるくる見廻しながら甲谷に云つた。

「どこへ行つた。芳秋蘭？」

甲谷はそれには返事も返さず黙つて立ち上ると、山口を捨てていきなり表へ飛び出した。芳秋蘭の黄色な帽子の寶石が、街燈にきらめきながら車の上に揺れていつた。甲谷は黄包車^{ワゴン}を呼びとめると、直ぐ帽

子を冠^{かん}らず彼女の後から追つていつた。彼は車の上で上半身を前に延ばし、もつと走れ、もつと走れ、と云ひながら、頭の中では芳秋蘭を追ひもせず、しきりにだんだん遠ざかつていく宮子の幻影を追つてゐるのであつた。

——あの女は、あれは素敵だ。あれが俺の嫁になれば、もう世の中は締めたものだ。

ブリツザ形の秋蘭の鼻は、ときどき左右の店頭に向きながら、街路樹の葉陰の間を貫いて亡^うつた。唾を吐いてゐる乞食や、舗道の上で銅貨を叩いてゐる車夫や、口の周囲を光らせながら料亭から出て来たお客や、煙草を喰へて人の顔を見てゐる売卜者^{うらひしや}やらが、通りすぎる秋蘭の顔を振り返つて眺めてゐた。甲谷は彼らがそんなに振り返り始めると、ふと忘れかけてゐる秋蘭の美しさを、再び思ひ浮^うべて彼らのやうに新鮮になつた。ひき緊つた口もと。大きな黒い眼。鷺水式^{さずみすいしき}の前髪。

胡蝶形^{てつていけい}の首飾。淡灰色^{たんがいしき}の上着とスカート。——しかし、宮子は？ 彼女の周囲では外人達が競つて宮子の嗜好を研究し、伸縮自在な彼女の視線の流れを追ひ求め、彼女と踊る敵の度数を暗黙の中に数へ合ひ、さうして、ますます宮子を高く彼らの肩の上へ祭り上げる方法ばかりをとつてゐる。しかし、あの女をシンガポールへ連れていつたら、美人の少いシンガポールの日本人達は、ひつくり返つて騒ぐだらう。

甲谷はふと気がつく、秋蘭の車が、突然横から現れた水道自動車に喰ひ留められて停止した。すると、甲谷の車はその隙に割り込んで、秋蘭を追ひ抜くと同時に、自動車の側面に沿つて迂り出した。甲谷の追つて来た努力は、全くそこで停止させられねばならぬのだ。彼は振り返つて秋蘭を見た。彼女は背広の青年を後に従へて、足を組み直しながら甲谷を見た。甲谷は彼女の顔から、一瞬、舞踏場の記憶を呼び起したかのごとき微動を感じた。しかし、甲谷の車夫は、並んだ自動車^{自動車}が急激に速度を出し始めると同時に、彼もまた一層速力を出して走り出した。秋蘭との距離がだんだん拡がつていつた。甲谷は再び振り返つて秋蘭を見た。だが、そのときには、もう秋蘭の姿は見えなくて、